



👁️👁️ みどころ

本作の奇妙なタイトルは吉行淳之介が 1966 年に発表した小説の題だが、私
 が知っている彼の代表作は本作ではなく、『砂の上の植物群』(64 年)だ。両
 者は共に、「愛と性」をテーマとして書き続けた吉行淳之介の“私小説”。そし
 て、本作は私と同じ学生運動世代で、1947 年生まれの荒井晴彦氏が長年映画
 化を望んでいた作品だ。

40 代の独身男を演じるのは名優・綾野剛だが、20 歳も年下の女子大生との
 奇妙な出会い、奇妙なプロセスを経ての奇妙な情事から生まれてくる、新たな
 愛と性の葛藤とは？時代を 1969 年に設定したことは劇中歌や主人公のゆった
 りしたセリフ回しから明らかだが、娼家の女主人を演ずる宮下順子やなじみの
 娼婦役を演じる田中麗奈にも、昭和の香りがブンブンと！

もう女はコリゴリ。そう考えて自分の世界にこもり、華麗なる独身男の生活
 を確立させていたはずの主人公だが、自己を投影させた小説の執筆が進んでい
 くと、次第に想像の世界(妄想の世界?)と現実の世界が混在一体となってい
 くことに。その結果、「星と月は天の穴」との彼の持論(?)はいかなる結末
 に・・・。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■三島由紀夫が生誕 100 年なら、吉行淳之介だって！■□■

2025 年 12 / 19 (金) の BS8 放送のプライムニュースは「三島由紀夫生誕 100 年...現代
 日本への問いかけとは」を特集し、三島が放った「言葉」から現代の日本が受け取るべき
 メッセージについて、三島文学を知る識者と共に読み解いた。1925 年に生まれた三島由紀
 夫は、裕福な家庭で多感な少年時代を過ごし、詩作等にもふけりながら 20 歳の時に終戦を
 迎え、1970 年の 45 歳の時に、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地での割腹自殺事件という劇的な最

期を遂げたが、三島文学の真髄とは？

他方、1924年4/13生まれの作家、吉行淳之介も2024年4/13に生誕100年を迎えたが、偶然その日は4/6から4/26まで続いた本作の撮影中だったというから、奇跡みたいな巡り合わせだ。それはともかく、吉行淳之介の妹で、長年女優業を続けていた吉行和子の死亡は2025年9/2。私は彼女の死亡を聞き、微博（ウェイボ）のサイトで、「昭和は遠くなりにつれ」の1つとして投稿したが、三島由紀夫の1年前に生誕100年を迎えた吉行淳之介文学の真髄とは？

私の独断と偏見によれば、三島文学は貴族趣味的色彩が強いものの、哲学的かつ内面的でありながら壮大な思想性を持っているが、吉行文学はあくまで私小説、そしてそのテーマは愛と性だから、ある意味ではとっつきやすいが、その分かりやすさ、分かりにくさを含めたその意義とは？

■□■ 『砂の上の植物群』 VS 『星と月は天の穴』 ■□■

1949年生まれ私が大学に入ったのは1967年4月。中学2年生頃から1人で、3本立て55円の日活映画専門の映画館に通っていた私は、三田明のヒット曲『美しい十代』を映画化した『美しい十代』（64年）を鑑賞した。同作は吉永小百合とのゴールドコンビで売っていた浜田光夫が、同作のために起用された新人女優・西尾三枝子と共演した79分のわかりやすい（単純な）映画だったが、貧しくも前向きに生きるヒロイン役を演じた西尾三枝子の輝くような大きな目が印象的だった。

ところが、そんな清純派としてデビューした女優・西尾三枝子が次回作では吉行淳之介の原作を映画化した『砂の上の植物群』（64年）に、その後誕生した「日活ロマンポルノ」張りのヌードも辞さない少女役で出演したからビックリ！中学生の私はさすがにそんな映画を映画館で鑑賞することはできなかったが、思春期真っ盛りだった私は、吉行淳之介の原作小説を読み、妄想を逞しくしていたことを今でも鮮明に覚えている。

そんな吉行淳之介が『星と月は天の穴』（66年）を発表していたことを私は今日まで全く知らなかったが、本作のチラシやキネマ旬報2025年12月号で特集した「映画／エロスについて考えてみた」を読めば、『星と月は天の穴』はまさに、『砂の上の植物群』の延長線上にある、吉行淳之介文学の真髄たる性と愛の私小説だ。

■□■ 脚本・監督の荒井晴彦に注目！ 劇中歌にも注目！ ■□■

荒井晴彦の脚本家としての実力は、日活ロマンポルノの名作『赫い髪の女』（79年）、『大鹿村騒動記』（11年）（『シネマ27』224頁）、『戦争と一人の女』（12年）（『シネマ30』199頁）、『幼な子われらに生まれ』（16年）（『シネマ40』102頁）、『福田村事件』（23年）（『シネマ53』252頁）等で実証済み。また監督としての実力は、『火口のふたり』（19年）（『シネマ45』219頁）、『花腐し』（23年）等々で実証されている。1947年生まれ彼は私とほぼ同世代の少し先輩という年代で、学生運動上りのキャラだけに、私とは共通点が多くその作品は私には分かりやすい。彼の脚本作、監督作のほとんどは“愛と性”をテーマに

したものだが、そのネタには吉行淳之介文学が最適だ。そのため、彼は長い間『星と月は天の穴』の映画化を狙っていたそうだが、今般、その夢が実現！原作の時代設定は1967年だが、本作では荒井はそれを2年繰り下げて1969年に設定。本作では矢添克二（綾野剛）が1人で住む家のすぐ前に小さな公園があり、その中にある2本のブランコがさまざまな物語（妄想？）を象徴するが、それをイメージした挿入歌『揺れないブランコ』は印象的な名曲だ。他方、本作のストーリー展開中には、山崎ハコが歌う『夜明けのスキヤット』（69年）、アン真理子が歌う『悲しみは駆け足でやってくる』（69年）が流れるので、お見逃し（お聞き逃し）なきように。それらを聞けば、時代はまさに私が大学3年生だった1969年だ。

■□■俳優・綾野剛に注目！40代男の小説家人生は？■□■

荒井晴彦監督が本作でタッグを組んだ俳優は、『花腐し』に続いて綾野剛。『そのみにて光輝く』（14年）（『シネマ32』166頁）、『新宿スワン』（15年）（『シネマ35』未掲載）等では超ハンサムな若手俳優というイメージだったが、1982年生まれの彼も今や40歳を超えて、本作の主人公のような「結婚生活に失敗した小説家」で「自身が書く小説の主人公A」のような愛と性に奔放な小説家（？）役がピッタリとハマる年齢に。自宅に籠って妄想たくましくしながら原稿用紙に向かって万年筆を走らせることを日課としている矢添克二は、10年前に妻に逃げられて以来独身のまま、今40代を迎えていたが、「女はこりごり！」と思う反面、男としての性欲はまだ健在！

そう思っていると、おなじみの娼家「乗馬倶楽部」で、おなじみの娼婦、千枝子（田中麗奈）と“いい時間”を過ごしていたから、なるほど、なるほど。娼家「乗馬倶楽部」の女主人（宮下順子）は矢添に、「若くていい子がいますよ」と誘っていたが、さて矢添は？さらに、矢添は現在執筆中の小説に「主人公A」として自分自身を投影させ、20歳も年下の大学生B子（岬あかり）との恋模様を綴っていたが、ある日、画廊で女子大生の瀬川紀子（咲耶）と出会い、“奇妙なプロセス”の中で、“奇妙な情事”に至ると、次第に創作の世界（妄想の世界？）と現実の世界がゴチャ混ぜになっていくことに。なるほど、なるほど・・・。

■□■キー・ウーマン瀬川紀子役を演じた咲耶（さくや）の評価は？■□■

前述した『砂の上の植物群』では、『美しい十代』で清純派女優としてデビューした西尾三枝子がキー・ウーマンとして見せたあっと驚く大胆な演技が注目を集めたが、本作でその役割を担うのは瀬川紀子役を演じた女優・咲耶だ。オーディションでの咲耶と荒井晴彦監督との“運命的な出会い”はパンフレットで紹介されているので、それを参照！スクリーン上における矢添と紀子との画廊での出会いから、奇妙なプロセスを経ての奇妙な情事に至る物語は本作前半のハイライトだが、紀子役を演じた女優・咲耶の出来は？

『キューポラのある街』（62年）における吉永小百合の演技や、『非行少女』（63年）における和泉雅子の演技は一世を風靡したし、武田鉄矢との奇妙な相性（？）で、名優・高

倉健の相手役を見事に果たしていた、山田洋次監督の名作、『幸せの黄色いハンカチ』（77年）における桃井かおりの演技も特筆もの絶品だった。

それらに比べると、本作に見る咲耶の演技は、大胆なヌード姿も見せてくれるし、大胆なベッドシーンも見せてくれるものの、その出来はハッキリ言ってイマイチ。とりわけ、ベッドシーンの演技力（？）は、1970年代に一世を風靡した日活ロマンポルノの名作における数々の名女優の演技に比べると大きく劣っていると言わざるを得ない。とりわけ本作では、娼家「乗馬倶楽部」の女主人役で、かつての「日活ロマンポルノの女王」と呼ばれた宮下順子が出演しているから、往年の彼女のベッドシーンでの演技と対比すれば月とスッポンの開き・・・？

■□■奇妙なタイトルの意味は？主人公の女性観の到達点は？■□■

本作で瀬川紀子役を演じた咲耶のイマイチの演技力に対して、絶妙の演技を見せてくれるのは娼婦・千枝子役の田中麗奈だ。私は『頑張っていまっしょい』（98年）以来の彼女のファンだが、年を経るごとに美貌の度を増してきた彼女が、本作では誰よりも矢添の心の奥を理解する娼婦役として導入部とラストで大きな存在感を示すので、それに注目！導入部での2人のベッドシーンはあっさりしたものだが、そこでは千枝子から「総入れ歯」であることを指摘された矢添の狼狽ぶりが興味深い。本作では、全編を通じて矢添のいかにも落ち着いたセリフ回しと、誰にも邪魔されない、確立した個をキープしながら、自信タツブリに生きている生活感が目につくが、その実、矢添の心の中には大きな劣等感も・・・。

他方、本作中盤では、紀子との間に適度な距離を保とうとする矢添と、部屋の中に入れてくれない矢添に不満を示し、今にもズケズケと矢添の生活圈と彼の内面に入ってこようとする紀子との間の葛藤が、恋模様の展開（？）の中でも顕著だが、そこで重要な小道具になるのが、矢添の部屋から見える小さな公園にあるブランコだ。フォークの名曲『白いブランコ』が大ヒットしたのも1969年だが、矢添の別れた妻は、あのブランコで一体何をしているの？また、本作ラストで1人ブランコに乗り、大きくこぐ紀子は一体どういう立場に置かれているの？さらに、本作ラストには娼婦を辞めて若いサラリーマンと結婚することになった千枝子に対して、矢添が「最後に一緒に街へ出てみるか」と誘い、娼家の外で夜を過ごすシークエンスが登場するが、その時の矢添の心境や如何に？

ちなみに、本作は「星と月は天の穴」という実に奇妙なタイトルの映画だが、これは紀子と並んで星空を見上げている時の矢添のセリフ。つまり、「星があんなに沢山」「あんなに綺麗に光っているのに・・・」と話す紀子に対して、矢添は「あんなものは、空の穴ぼこだよ。」「月ももっと大きな穴ぼこだ」と返したため、結局「・・・星と月は天の穴、なのね」という紀子のセリフで落ち着くわけだ。このように、いかにも昭和の香りがプンプンとするこのセリフのやりとりに込められた意味や如何に？

2025（令和7）年12月26日記